

〈資 料〉

「浜田省吾」が構成する戦後の軌跡

A Postwar Locus Constructed by “Shogo HAMADA”

諸 井 克 英
(Katsuhide MOROI)

はじめに

’72年にソロ・デビューした「浜田省吾」は、今なお音楽アーティストの第一線を駆け抜けている。本論文では、「省吾」が、青年期の彷徨を経てわが国の戦後の語り部としての地位を確立し、さらには親世代としての自覚を唱導する様を、論じる。

まず、「省吾」のプロフィールの確認をしよう。「省吾」は、’52年に広島・竹原市で生まれ、父親の仕事（警察官）の関係で広島県内を転々とした。進学校である呉三津田高校に入学するが、当時の世情（小熊，2009参照）に対する関心の高まりと音楽パフォーマンスへの没頭もあって、学業にあまり力を注ぐことはなかった。結局、卒業後1年間の浪人生活を送り、神奈川大学法学部に入学した。しかし、1年半で広島に戻り、バンド活動を再開し、’75年にバンド「愛奴（AIDO）」でシングル・デビューに至った。このバンド活動は「省吾」の想いのずれを生じ、’76年にアルバム『生まれたところを遠く離れて』（A）とシングル『路地裏の少年』でソロ・デビューを飾ることとなった。

その後、音楽性やビジネスの方向づけの自由を確保するために、’83年にはそれまで属していた「ホリプロダクション」から独立し「ロード&スカイ」を設立した。これによって、「省吾」は、「原田真二」や「世良公則&ツイスト」などに代表される「ポップ・アイドル」路線への企業側からの圧力から解放された。自立したメッセージの伝え手として音楽アーティストとしての「省吾」が始動した。その後、アルバム創作活動とともにコンサート活動を中心とした音楽パフォーマンスを精力的に展開し、今なお多くのファンを引きつけている。

’86年の2枚組アルバム『J. BOY』（H）の商業的成功

（オリコン・アルバムチャート1位）によって「省吾」は音楽アーティストとして方向性を確信するに至った。さらに、「悲しみは雪のように」は、’90年代のテレビ・ドラマ全盛時代のヒット作品の一つである『愛という名のもとに』（フジテレビ：’92年1-3月放映）の主題曲に採用された（’81年発売アルバム『愛の世代の前に』（F）収録、’92年シングル再発売）。この曲は、当時のドラマ・ブームと連動してオリコン・シングルチャートの1位を達成し、歌手としての「省吾」は一般的な音楽ブランドとして認知されるようになった。

彷徨する青年

’05年に発表されたアルバム『MY FIRST LOVE』（J）に収められた「初恋」（J）では、「省吾」の少年時代からの音楽経験史が開示される。青年期を呉で過ごした少年だけでなく、「省吾」と同年代であれば誰もが共有した「ビートルズ」の衝撃に始まり、彼を通り過ぎていったロック・アーティストが列挙される歌である（「海辺の田舎町／10歳の頃／ラジオから流れてきた“The Beatles”」、「アメリカ生まれのRock’n’Roll／やっているオレは誰だ…?」、「オレの恋人はRock’n’Roll／そして今でも夢中で追いかけてる」）。つまり、音楽アーティストとしての確立した地位を得た「省吾」の原点は米国を祖国とするロックンロール音楽にあるのだ（「いや、やっぱり原点はアメリカン・ロックだと思いますね。60年代のビーチ・ボーイズとかヤング・ラスカルズとかR&Bとかの8ビート、それとディランなんかの言葉ですね。」（浜田，1999））。

「省吾」は、地方の進学校である呉三津田高校（「省吾」に言わせれば「予備校のような学校」（田家，1990）であるが、「親父の期待にそえたと、地元の名門校に入れたというプライドみたいなものはあった」（浜田，1999））に入学するが、受験勉強よりも音楽パフォーマンス

ンスに没頭する青年であった。一般的に青年期では自己が揺らぐ中で自己を再編成するという自己確立課題に直面する(諸井, 2002 参照)。「省吾」は、そのような課題に音楽パフォーマンスを1つの重要な柱として格闘したのだ。

彼のソロ・デビュー曲「路地裏の少年」(A)では、青年の心の彷徨いが歌われる。主人公の心の居場所はいつも「ハーモニカ」や「フォーク・ギター」を携えながら「路地裏」にあり、22歳になってもこの彷徨いは継続する(「口づさめば悲しい歌ばかり」「届かぬ想いに胸を痛めて」「今日もまた呼ぶ声に應えては」「訳もなく碎かれて手のひらから落ちて」「今はおれ22」「初めて知る／行き止まりの路地裏で」)。この限りでは、定型的な自己の揺れが表出されているといえる。しかし、閉塞的に自己再編が図られているのではなく、興味深いことに、実社会と対置した自己のもがきを孕んでいるのだ(「狭い部屋で／仲間と夢描いた」「いつかは／この国／日を覚ますと」)。

つまり、「省吾」という青年の心性は、'68年から'69年を頂点とした全共闘運動に象徴されるわが国の「青年の社会への反抗」(Keniston, 1960)の波に始まり、「連合赤軍」による「あさま山荘事件」というその反抗の実質的終焉とともにあった(小熊, 2009 参照)。実際、彼は、呉三津田高校2年次には「高校の自由化」を唱え「生徒会の役員に立候補」するし(田家, 1990)、神奈川大学の法学部に入学した理由は、「一連の授業料値上げ反対闘争で、学生側が、値上げを撤回させることに成功した数少ない大学」(田家, 1990)であったからだ。しかし、大学に入学した頃はすでに青年による反抗の終焉に伴う青年同士の抗争が頻発しており(「神奈川大学というセクト争いの激しいところに入って、大きな事件を目のあたりにしたりして、その現実とのギャップが大きかったわけです」(浜田, 1999))、結局1年半で大学を退学し、広島に戻るのだ。このように、「省吾」の自己課題確立上のもがきは時代条件に影響されたものである。

混迷する社会との対峙

先述したように、「省吾」は、'76年にソロ・デビューしたが、所属していたCBSソニー側は「ポップアイドル」的な作品を彼に求めた(「ちょうど、ボズ・スキヤッグスとか、シティー・ポップみたいなのがあってね。で、みんな僕をそういうもんにしたかったんですよ。」(浜田, 1999))。2枚目のアルバム『ラブ・トレイン』(B)のジャケットが当時の企業側の意図を象徴す

る(「真っ白な襟のついたブルーに黄色と赤の横じまのラガー・シャツ、下はリーバイスの白の短パン。それに白のハイ・ソックスに、赤いラインの入った、これも白のアディダスのテニス・シューズ、レイバンのサングラスをかけた省吾が、心持ちはにかんだように膝をかかえて微笑んでいる。」(田家, 1990))。歌に対する彼自身の思いと企業側の思惑との乖離を孕みながらアルバム制作は継続されるが(「この『イルミネーション』(C)と『MIND SCREEN』(D)っていうのはもうどん底だったですよ。だからもう何を書いていいか分からない。で、言葉が失語症のように何も出て来ないっていう感じです。」(浜田, 1999))、結局、「浜田」はこの乖離を「結局自分の言葉で自分のことを、唄いたいと思うように唄うしかないんじゃないか」(浜田, 1999)という決断で対処し、5作目の『君が人生の時…』(E)で実現する。

「省吾」が駆け抜けた時代状況を大きな背景として、青年としての「省吾」に課された自己再編課題の解決は、'86年の2枚組みアルバム『J.BOY』(H)として結実した。タイトル曲である「J.BOY」(H)は、日本人が第2次大戦後以来願望してきた「経済的に豊かな社会」の実現を見た'80年代の状況批判である。彼は、高度成長社会への狂奔が自己を喪失する様を嘆きながら(「仕事終りのベルに」「とらわれの心と体／取り返す／夕暮れ時」「果てしなく続く生存競争／走り疲れ」「家庭も仕事も投げ出し／逝った友人」)、この経済的繁栄に不安を投げかけるのだ(「J.BOY／頼りなく豊かなこの国に」「J.BOY／何を賭け何を夢見よう」)。そして、喪失さかけている自分自身の取り戻しが唱導される(「J.BOY／打ち砕け日常ってやつを」「J.BOY／受け止める／孤独ってやつを」)。

つまり、時代状況の中で自己再編を試みた「省吾」は、米国をルーツとするロックを志向する音楽アーティストとしての自分に、その米国の傘下で軌跡の繁栄を遂げた日本への不安感情を照射させ、未来(子どもたち)への責任をもつ自分たち(=大人)という形で力動的に自己を確立したのだ。さらに、この根源には警察官であった父親との心理的確執が次に述べるような形で止揚された父親への尊敬の念が存在している。

父親との心理的確執から親世代としての自覚へ

'05年のアルバムに収録された「I am a father」(J)では、自らが親世代であることの自覚が唱導された。父親が仕事中毒に陥っている現実を見つめることからこの歌

は開始される（「額が床に付くくらい頭を下げ毎日働いてる」「傷ついている暇なんか無い／前だけ見て進む」）。この認識は先述した「J.BOY」と同一線上にある。「J.BOY」ではきわめて社会志向的解決が示唆された。他方、この「I am a father」では、そのような解決がより具体化した。つまり、「社会の未来＝現前の子どもたち」という図式の下に、その「現前の子どもたち」の守り手としての自らの存在の自覚、親世代としての自覚が促される（「家族の明日を案じて／子供達に未来を託して」「傷ついている暇なんか無い／命がけで守る」）。「かつて夢見る少年だった」自分も「今では Father」なのだ。興味深いことに、子どもたちの未来の守り手である父親はかつてのような強者としての父親ではない（「スーパーマンじゃない／ヒーローでもない」「チャンピオンじゃない／リーダーでもない」「ムービースターじゃない／ロックスターでもない」）。

実は、この親世代としての自覚（＝称揚）は、以下に述べるように、青年期における父親との心理的確執に根ざしたものである。

「省吾」の父親は、第2次大戦中から広島県で勤務する警察官であった。父親は、米軍が'45年8月6日に広島市に人類史上初めて原子爆弾投下した時には、尾道署に勤務していた。職業的責務として、父親は「投下直後に尾道地区の医者と看護婦と青年団120人くらいのリーダーとして救助に向かった」（田家，1990）。そこで「巨大な屍体の集団」と直面するが、当然ではあるが救助活動中で放射能を浴び（＝2次被爆）、「省吾」が「生まれる直前に、父親が原爆症で肝臓障害を起こし、生死をさまよう大病をしていた」（田家，1990）。その後、父親は、「省吾」がわが国のトップ・アーティストとしての地位を確立した『J.BOY』（H）の成功を見、その翌年のツアー中に癌で死去した（'86年）。

「省吾」における父親との関係は、多感だった青年期には反発の対象として機能した。先述したように当時の時代状況（＝青年による社会に対する反抗）に共振した「省吾」は社会権力の可視的存在である警察官であった父親と折りにふれて口論＝対立することになる。しかし、広島市と地理的に近接した土地（＝呉）で青年期を過ごしたことや、先述したような父親の2次被爆経験に対する理解は、冷戦構造下での核兵器競争や原子力エネルギーに対する否定的態度を「省吾」の中に醸成していた。これは、8枚目のアルバム『THE GATE OF THE PROMISED LAND～約束の地』（G）のジャケット・デザインに見事に表現された。表面には、「波打ち際に置

かれた不気味な巨大な金属体が太陽の光を放射」し、その金属体には「Flammable（危険物）」と英語で書いてあり、ジャケット内側には「夕陽に照らされて遊んでいる男の子と女の子が描かれて」（田家，1990）いるのだ。この核の問題へのこだわりは、ラブ・ソングにさえ反映される（「単純なラブ・ストーリーはない。」「文明の中で生きるしかない人間は、例えば核とどう付き合えばいいのか。彼は、そうした問い掛けをラブ・ソングの中でさえ行うのだ。」（佐藤，2012））。

'81年発売の『愛の世代の前に』（F）では、次のような「省吾」の思いが反映される。「1945年に原爆が投下されて、核融合というのが地球というもろい生命体の中に持ち込まれ」「それまでの何億年とその後のわずか30年というのは、全く違う世代」（TOKYO FM 出版，1996）であり、核兵器が地球上から廃絶されたときに「愛の世代＝ラブ・ジェネレーション」が出現する。この思いは、'82年春に発表された「香川県仁尾町」での特異な形の野外コンサートへとつながる。当時の「仁尾町」は、'73年の「第1次オイル・ショック」を契機とする石油資源に対する代替エネルギー獲得の試みとして太陽熱エネルギー発電を行っており、「全戸数のかなりの割合の電力を太陽熱エネルギーでまかなっているという全国でも珍しい町だった」（田家，1990）。しかしながら、太陽熱を利用した野外コンサートという象徴的な試みは、結局、次の3つの理由で断念された。①プロダクション側のエネルギー問題は政治的という判断、②野外コンサートのために何万人もの人々が集うには「仁尾町」の交通事情や宿泊設備の問題、③太陽エネルギーの可能性に関する曖昧さ（田家，1990）。

「省吾」は、'83年に福岡の「中道海浜公園」で野外コンサートが実施した。興味深いことに、この公園は、戦後米軍によって「博多基地」として使用されていたが、'72年にわが国に返還された。したがって、このコンサートは、先述した「愛の世代」という「省吾」の考えにとって象徴的となる（「世界の軍事施設がね、こういうふうには素晴らしい公園になって、毎年、こうやっていろんなところで野外コンサートができればいいなと思ってます。」）－コンサート中の「省吾」の発言（田家，1990）－。

このように、「省吾」が青年期以来抱えていた父親に対する心理的確執は、年老いていく親への憧憬や自分自身の成長によって自然に解決されたというよりも、「省吾」や父親を日本の戦後史の中に組み込むことにより、止揚されたのだ。それは、言うまでもなく、「省吾」を

単なる音楽アーティストではなく、時代の「語り部」としての地位を確立させることとなった。

おわりに

「省吾」は、以上に述べてきたように、「ある日突然レコードが爆発的に売れたわけでも、テレビ番組やコマercialを駆使した売り出し作戦があったわけでもない、コンサートによって成長してきた」(田家, 1990)。このコンサート重視の信念は、昭和から平成への変り目の異様な自粛ムードや東北地方太平洋沖地震後の状況においても全国コンサートをやり抜いたことによっても証明されよう。

'88年3月から'89年2月までの「ON THE ROAD '88」では合計100本のコンサートが行われた。実は、このツアーは、'88年秋の昭和天皇の重体によって「天皇陛下は、国のお父さん」(田家, 1990)という主張を背景とした自粛ムードや、'89年1月7日の崩御という中で挙行された。このツアーは'88年3月発売のアルバム『FATHER'S SON』(I)とタイアップしたものである。このアルバムは『J.BOY』の制作意図を継承している。例えば、「RISING SUN」(I)では、わが国の戦後の軌跡が歌われる(「焼跡の灰の中から／強く高く飛び立った」「1945年 打ちのめされた／砕けた心のまま」「1945年／焼跡から 遠く飛び立った／今」)。興味深いことに、最後の10曲目の「THEME OF FATHER'S SON」(H)では、彼の家族への想いを浮き彫りにする父と母の憧憬が描かれる(「思い出すよ」「あの砂浜 歩いた日々の」「父と母の姿」)。先述したように、「省吾」や父親が歴史の中に組み込まれて行く中で、情緒的存在としてよりも客体的存在として親が認識されたのだ。

'11年3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、「年齢や職業を問わず、少なくとも日本に暮らしている人」に「自分が孤島に一人で生きているのではない」(田家, 2012)ことを否応なく確認させた。日本全体が騒然とする中、「省吾」は、4月16日に計画していたツアー「ON THE ROAD 2011 The Last Weekend」を静岡エコパアリーナから開始した。

日本の東北部を襲った地震は、地震動と津波によって一連の放射性物質の放出となる福島第一原子力発電所事故も引き起こした。まさに、先述したアルバム『J.BOY』の1曲目の「A NEW STYLE WAR」で歌われた一節通りの事態が起きたのだ(「ひび割れた原子力」「雨に溶け／風に乗って」「どこへも隠れる場所はない」)。「警鐘が現実になった」(田家, 2012)。つまり、結局のところ、彼が『J.BOY』に託した想い(=危機)は、'91

年のバブル崩壊(成長停止社会の到来)とともに、現実のものとなってしまった。

ここまで述べてきたように、「省吾」は、「時代の語り部」としてのメッセージを絶えず聴き手に投げかけてきた。大澤(2013)によれば、実際に当該出来事が起きた時点では曖昧なものが時間的に経過した時点から見ることによって明確な意味づけを得ることが可能になる。つまり、当該時点で抱かれている社会的現実を越えた顕在化されていない志向性(「余剰的同一性」)(大澤, 2013)が存在し得る。大澤はこのことによって「未来の他者への呼びかけ」が可能になるとした。「省吾」が'80年代になって以来試みていることはこの「未来の他者への呼びかけ」と解釈できよう。その試みが多くの聴き手を引きつけているのだ。

引用文献

Keniston, K. 1960 Youth and dissent. Harcourt Brace Jovanovich 高田昭彦・高田素子・草津攻(訳)『青年の異議申し立て』1977 東京創元社

諸井克英 2002 彷徨する親子関係 和田 実・諸井克英著『青年心理学への誘い-漂流する若者たち-』ナカニシヤ出版 pp.45-66.

浜田省吾 1999『青空のゆくえ-浜田省吾の軌跡-』ロッキング・オン

小熊英二 2009『1968 [下]-叛乱の終焉とその遺産-』新曜社

大澤真幸 2013『〈未来〉との連帯は可能である。しかし、どのような意味で?』弦書房

佐藤 睦 2012『孤高のロッカーとして歩み続けるストーリーテラー』ROCK JET (シンコー・ミュージックMOOK), 49, 20-26.

田家秀樹 1990『陽のあたる場所-浜田省吾ストーリー-』角川文庫

田家秀樹 2012『僕と彼女と週末に-浜田省吾 ON THE ROAD 2011 The Last Weekend ドキュメントストーリー-』幻冬舎

TOKYO FM 出版 1996『浜田省吾事典 COMPLETE SHOGO HAMADA』TOKYO FM 出版

【音源】

浜田省吾

A:『ラブ・トレイン』CSCL-1162 (<'77年)

B:『生まれたところを遠く離れて』CSCL-1161 (<'76年)

C:『イルミネーション』CSCL-1163 (<'78年)

D:『MIND SCREEN』CSCL-1164 (<'79年)

E : 『君が人生の時…』 CSCL-1165 〈'79年〉

H : 『J.BOY』 50 DH 510-1 〈'86年〉

F : 『愛の世代の前に』 CSCL-1167 〈'81年〉

I : 『FATHER'S SON』 SRCL-4597 〈'88年〉

G : 『THE GATE OF THE PROMISED LAND～約束の地』 SRCL-4603 〈'82年〉

J : 『MY FIRST LOVE』 SECL-208 〈'05年〉

(2014年11月6日受理)